サッカー競技の得点推移

——その比較と分析を中心として——

恩田　裕

（1）

多くの運動競技の中で，特にボール又はそれに類する用具を媒体[1]として，複数の競技者が勝敗を争う行動様式を基盤とする競技を，球技又はボールゲーム (Ball Games) と呼ぶ。

これは94種目に及ぶ運動競技[2]のうち，34種目[3]が該当するが，このボールゲームを更に相互の異質性を消去し，等質性を抽出する過程を通し，当面する競技の構成素因を取り出すことにより，形式的定義即ち当該競技の概念規定が可能であると考える。

即ちボールゲームとは，（Ⅰ） 一個のボールで相互に攻防を繰返すことを基盤とする，単数ボール型（攻防型）と，（Ⅱ） 個人専用のボールを用いて目標地に投打する，複数ボール型（攻撃型）[4]，に大別される。

この（Ⅰ） 単数ボール型の競技は，その勝敗を決する様式により，（1） 得点総量を競うもの，（2） 一定量の得点を先取するもの（テニス型）[5]，に分別し得る。

これは同時に，(1) 競技場がネット等で敵味方に分割されていない，従って一個のボールを，同時に奪い合うことを前提とする競技と，(2) 競技場がネット等で敵味方に分割され，自陣ボールを相手に投打することを前提とする競技に分別されている。

更にこの得点総量型，は競技時間の制限がある，ない，によって(i)ベースボール型[6]，(ii) フットボール型[7]，に分別される。

以上を図示すると次の通りである。

- ボールゲーム
  - 複数ボール型（ゴルフ，ボーリング型）
  - 単数ボール型
    - 得点先取型（テニス型）
    - 得点総量型
      - 時間制限なし（ベースボール型）
      - 時間制限あり（フットボール型）

以上の構成素因の分別から本論で述べるサッカー競技（フットボール）[8]は，「一個のボールを双方互格の条件で奪い合い，一定時間内に目標の場所にボールを搬入した総量の多少により勝敗を決する競技」と定義する。

この定義を実際の競技に代入すると，目標の場所にボールを搬入した総量を，「得点」と呼び，一個のボールを双方が奪い合う段階で，互角の条件を規定するものを，「規則」[9]と呼ぶ。

更に，相手チームの目標地点へのボールの搬入を妨げる働きを，「守備」，味方チームは出来得る限り相手に妨害されずに目標地点にボールを搬入する働きを，「攻撃」，この守備と攻撃をいかに労働力を軽減して効果的に行うかという組織的働きを，「戦術」と呼ぶ。

従って攻撃力と守備力が均衡を失った時，得点が生れ，競技としての内容は全てこれに帰結する。

最も原初的なフットボールは，一個のボール又はそれに類するものを，何の制約も受けず，手段を選ばず，目標の場所に搬入せんと努め，一方が目的を達成した時点で競技が終了した[10]。

しかしその後の歴史的な時間の経過の中で多くの制約が付加され[11]，これが得点に多様な形で介入し，干渉する要因を含んでいた。

この制約がフットボール競技の原理的な構成素因に近接すればする程，より積極的な影響を与えたことは当然のことである。

従来得点に至る様々な要因には多くの優れた議論がなされ[12]，今後共その解明がより重要な意味を持つことは明らかであるが，昨今の発達の著し

い映像文化ですら極く一部分の競技内容しか伝えていない事実を考えると，客観的事実を簡潔に伝達して呉れる得点自体を時間的推移に従って，連続的に，事実史的立場から検討を加えることは，当該競技の論理的法則性を抽出し，加えて将来的予見に極めて密接した効力を有すると考える。

更に単独のチーム単位での得点推移を考えると，自チームの得点と相手チームの得点が結果的には攻撃と守備の因果関係を示すものであり，この関係を多様的視点から探査することは，個々のチームに比較検討の資料を提示し，現況に至る過程を分析して自チーム及び相手チームの特性に近接することを可能とする。

1) Garatskiy における投棒，Ice-Hockey のパック等を指す。
2) 日本体育協会監修，現代スポーツ百科事典，大修館，1970
"*Encyclopedia of Sports Science and Medicine*," 監修 The American College of Sports Medicine, Macmillan Co., 1971 では104種目をあげている。
3) 後掲注，(4)(5)(6)(7)の競技の合計数。
4) Golf, Bowling, Curling, Garatskiy, Croquet, Codeball.
5) Tennis, Table-Tennis, Soft-Tennis, Jai-alai, Badminton, Volleyball, Fives.
6) Cricket, Softball, Rubberball-Baseball, Baseball, Pesäpallo, Pelota.
7) Ice-Hockey, Water-Polo, Netball, Basketball, Hurling, Bandy, Handball (International), Hockey, Polo, Rugby, Lacrosse, Touch-Football, American-Football, Football (Australian rules, Canadian, Gaelic, Six-men), Soccer.
8) 日本ではサッカーとして親しまれているが，国際的には Football が正式の名称である。
9) 規則は互角の条件を規定するだけのものではない。この規則を構成する要因を分析することは興味深い問題であるがここでは言及しない。
10) Young, P.M., "*A History of British Football*," Stanley, 1969, pp. 43-61.
11) Delaney, Terence, "*A Century of Soccer*," Heinemann, 1963.
Signy, Dennis, "*A Pictorial History of Soccer*," Spring, 1968.
The F.A., "*The History of the Football Association*," Naldrell, 1953.
12) その代表的なものとして次のものを掲げる。

Fédération Internationale de Football Association, World Cup 1974 Final Competition, Technical Study, Observation on Matches in Final Tournament, pp. 33-47.

(2)

近代サッカーの発展の系譜は，守備に重点を置く戦術的展開を基調として来た[1]と言われるが，特に近年において，その傾向は強まり，システム変遷の歴史は守備的立場の競技者の数的優位を基礎的原理としているとも言える[2]。この傾向を，守備重点主義として批判的立場をとる競技関係者も多い[3]が，一方では確にシステム的には後方に配置される競技者が増えてはいるが，これが必ずしも守備的傾向を意味するものではない[4]，とする把え方があるのも当然である。

そこで本稿では，サッカー競技が守備重点主義に傾き，実際に得点が減少したかどうか，減少したと仮定したら，それが何に起因するかを得点推移の面から概略的に検討することを意図し，以下の資料に関し若干の考察を加えることにした。

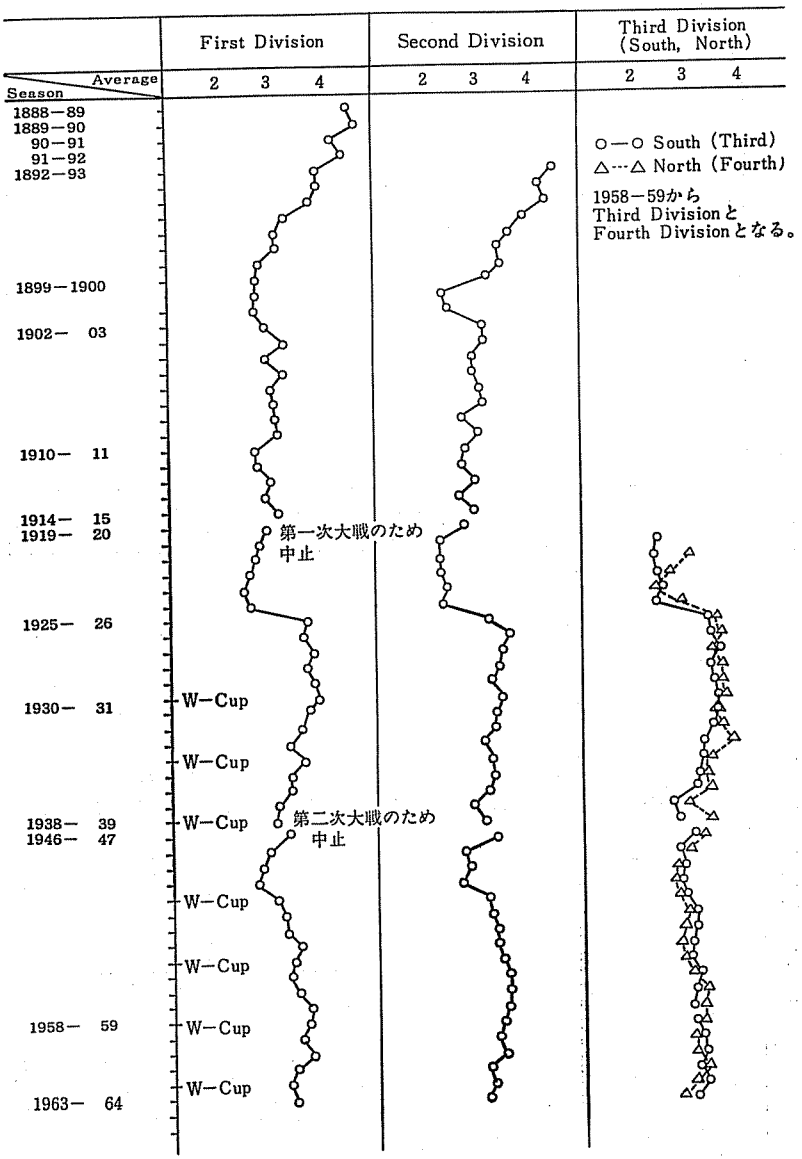
The Football Association（以下 F. A. と言う）[5]は1888年に F. A. Football League が発足して以来の全試合結果（Results）を，部別（Division），年次別に一試合当りの平均得点として集計されたものを報告している[6]。

表—1である。図—1は，この表を基に平均得点を時系列的にグラフに示したものである。

The F. A. はヨーロッパ大陸における一般的傾向，とりわけイタリアの守備重点主義が，F. A. の Football League に，影響を与えているとする非難が事実に即したものかどうかを検討しようと意図している[7]。

これによると1925年の平均得点が激増する原因は，新しく制定された Off-side Laws の効果，即ち規則改正による実質的効果と考えているが[8]，この一連の得点推移の変動に時期的な若干の差が生じているのは，その競

図—1　F. A. Football League の平均得点の年次別推移



表—1　F.A. Football League の年次別平均得点表 F.A. Year Book (1965-66) より。

Season	First Division			Second Division			Third Division(south)			Third Division(North)		
	Games Played	*Goals Scored*	*Average*	*Games Played*	*Goals Scored*	*Average*	*Games Played*	*Goals Scored*	*Average*	*Games Played*	*Goals Scored*	*Average*
1888—89	132	585	4.50									
1889—90	132	611	4.67									
1890—91	132	554	4.20									
1891—92	182	777	4.40									
1892—93	240	936	3.90	132	591	4.48						
1893—94	240	939	3.91	210	894	4.23						
1894—95	240	917	3.80	240	1023	4.33						
1895—96	240	807	3.32	240	943	3.90						
1896—97	240	757	3.12	240	907	3.68						
1897—98	240	724	3.10	240	860	3.45						
1898—99	306	868	2.79	306	1103	3.48						
1899—1900	306	856	2.75	306	984	3.23						
1900—01	306	852	2.75	306	819	2.35						
1901—02	306	840	2.70	306	885	2.45						
1902—03	306	885	2.90	306	940	3.14						
1903—04	306	939	3.30	306	942	3.14						
1904—05	306	904	3.95	306	902	2.94						
1905—06	380	1242	3.26	380	1116	2.93						
1906—07	380	1148	3.02	380	1155	3.02						
1907—08	380	1176	3.09	380	1187	3.12						
1908—09	380	1185	3.11	380	1026	2.70						
1909—10	380	1194	3.14	380	1166	3.06						
1910—11	380	1028	2.70	380	1050	2.76						
1911—12	380	1057	2.78	380	1032	2.71						
1912—13	380	1153	3.03	380	1123	2.95						
1913—14	380	1103	2.90	380	1011	2.66						
1914—15	380	1201	3.16	380	1135	2.98						
1919—20	462	1332	2.88	462	1285	2.78						
1920—21	462	1276	2.76	462	1061	2.29	462	1133	2.45			
1921—22	462	1254	2.71	462	1061	2.29	462	1118	2.41	380	1150	3.02

1922—23	462	1215	2.62	462	1055	2.28	462	1141	2.46	380	1019	2.68
1923—24	462	1142	2.47	462	1125	2.43	462	1176	2.54	462	1150	2.48
1924—25	462	1192	2.58	462	1068	2.31	462	1120	2.42	462	1320	2.85
1925—26	462	1703	3.68	462	1487	3.21	462	1555	3.36	462	1628	3.52
1926—27	462	1668	3.61	462	1668	3.61	462	1592	3.44	462	1692	3.65
1927—28	462	1765	3.82	462	1607	3.47	462	1680	3.63	462	1676	3.62
1928—29	462	1688	3.65	462	1576	3.41	462	1614	3.49	462	1696	3.67
1929—30	462	1758	3.80	462	1513	3.27	462	1632	3.53	462	1681	3.63
1930—31	462	1823	3.94	462	1608	3.48	462	1669	3.61	462	1714	3.70
1931—32	462	1727	3.73	462	1567	3.38	462	1694	3.66	420	1510	3.59
1932—33	462	1645	3.56	462	1542	3.33	462	1634	3.53	462	1691	3.65
1933—34	462	1524	3.29	462	1441	3.11	462	1526	3.30	462	1800	3.89
1934—35	462	1677	3.62	462	1502	3.25	462	1534	3.31	462	1593	3.44
1935—36	462	1556	3.36	462	1533	3.31	462	1497	3.24	462	1533	3.31
1936—37	462	1555	3.36	462	1479	3.20	462	1496	3.23	462	1602	3.46
1937—38	462	1340	3.09	462	1346	2.91	462	1264	2.73	462	1401	3.03
1938—39	462	1418	3.06	462	1441	3.11	462	1319	2.85	462	1609	3.48
1946—47	462	1513	3.27	462	1547	3.35	462	1458	3.15	462	1537	3.32
1947—48	462	1343	2.90	462	1247	2.69	462	1327	2.87	462	1369	2.96
1948—49	462	1303	2.82	462	1303	2.82	462	1347	2.91	462	1301	2.81
1949—50	462	1247	2.69	462	1231	2.66	462	1336	2.89	462	1315	2.84
1950—51	462	1413	3.05	462	1469	3.17	552	1623	2.94	552	1608	2.91
1951—52	462	1490	3.22	462	1488	3.22	552	1740	3.15	552	1658	3.00
1952—53	462	1508	3.26	462	1535	3.32	552	1745	3.16	552	1604	2.90
1953—54	462	1626	3.51	462	1535	3.32	552	1695	3.07	552	1587	2.87
1954—55	462	1572	3.40	462	1597	3.45	552	1677	3.03	552	1627	2.94
1955—56	462	1529	3.30	462	1628	3.52	552	1772	3.21	552	1771	3.20
1956—57	462	1612	3.48	462	1644	3.55	552	1760	3.18	552	1841	3.33
1957—58	462	1721	3.72	462	1637	3.54	552	1701	3.08	552	1783	3.23
							Third Division			Fourth Division		
1958—59	462	1692	3.65	462	1604	3.47	552	1733	3.13	552	1794	3.25
1959—60	462	1618	3.50	462	1565	3.38	552	1816	3.29	552	1734	3.14
1960—61	462	1724	3.73	462	1609	3.48	552	1842	3.33	552	1810	3.27
1961—62	462	1582	3.42	462	1473	3.18	552	1772	3.21	506	1690	3.33
1962—63	462	1536	3.32	462	1496	3.23	552	1855	3.36	552	1755	3.17
1963—64	462	1571	3.40	462	1467	3.17	552	1730	3.13	552	1631	2.95

技力（Division 別）の高低によって競技規則改正に順応出来る範囲が限定されるためとする考えは示していない。これに関しては，現在検討中である，国際的水準での競技に関する情報が，国内競技団体や競技者にどのように受け入れられているか，に関連し後日に議論することにしたい。

更に F.A. は Division 別，年次別の最高得点の比較等を行い，First Division の成績の優秀さを示している[9]が，本稿は以下において全体的な傾向をその他の資料との比較において独自の立場で探った結果のみを示すことにする。

1　Division 別の驚くべき類似性は得点に介入，干渉する内的要因が，その技術的要素以外にあることを示唆している。即ち Division 別とは，原則的に技術的差と考えて良いからである（図—1の曲線の近似性）。

2　1888年から1902年までの大きな平均得点減は，サッカーが競技として発展して来た過程で重要な規則改正，増補が行われた時期と一致する[10]。

即ち本来的な Gentlemen は，偶然の過失か，無知による以外の理由で規則を犯すことはあり得なかった競技[11]が次第にその社会情勢を背景として処罰に関する規定を必要とし，競技者の自律でなく外的に競技をコントロールする，審判に関する諸規定が成立した時期と一致する[12]のである。

3　1902年以後，又若干の上昇が見られるが，これも規則上の大きな変化，即ち規則違反に対する処罰（Punishment）に関して，現行の Law 12, Fouls and Misconduct の Punishment の原型が成立した時期と一致する。

多和[13]がこれに関して優れた報告を行っている。それによれば，1903年の規則改正ではこの Punishment 即ち Free-kick は現行9項目の Fouls の内，7項目に関し Direct Free-kick によるゲーム再開を認めている。

4　1925年から1939年に向けて若干下降するが，これは戦術的進展，即

ち Herbert Chapman の率いた Arsenal が創案した，後日 Third Back System 又は，W.M. Formation と呼ばれる戦術的，技術的展開の結果[14]及び，第二次大戦に向けて急傾斜して行く社会情勢の反映と見るのが妥当である。

5　第二次大戦後の数年の下降の原因は不明である。

6　1950年以後の若干の上昇については，同年英国四協会[15]も従来の保

表—2　International Matches Results 1873-1887
F. A. Year Book (1974-75) により作表

	E vs S		E vs I		E vs W		S vs W		S vs I		W vs I	
1887	*2	3	7	0	*4	0	2	0	4	1	1	4
86	1	1*	6	1	3	1*	4	1	7	2	5	0
85	*1	1	4	0	*1	1	8	1	8	2	8	2
84	0	1*	8	1	4	0*	4	1	5	0	6	0
83	*2	3	7	0	*5	0	3	0			1	1
82	1	5*	13	0	3	5*	5	0			7	1
81	*1	6			*0	1	5	1				
80	4	5*			3	2*	5	1				
79	*5	4			*2	1	3	0				
78	2	7*					9	0				
77	*1	3					2	0				
76	0	3*					4	0				
75	*2	2										
74	1	2*										
73	0	0*										
1873	*4	2										
合計得点	27	48	45	2	25	11	54	5	24	5	28	8
平均得点	1.68	3.00	7.50	0.33	2.77	1.22	4.50	0.41	6.00	1.25	4.66	1.33

	試合	勝	分	負	勝率(%)	分率(%)	負率(%)	得点	失点	G・A	得／試	失／試
スコットランド(S)	32	26	4	2	81.25	12.50	6.25	126	37	3.40	3.93	1.15①
イングランド(E)	31	14	5	12	45.16	16.12	38.70	97	61	1.59	3.12	1.96②
ウェールズ(W)	27	6	2	19	22.22	7.40	70.37	44	87	0.50	1.62	3.22③
アイルランド(I)	16	1	1	14	6.25	6.25	87.50	15	97	0.15	0.93	6.06④

*印ホームチーム

守的姿勢を改め，ワールドカップ大会への参加を決定[16]イングランド及びスコットランドが出場権を得たが，スコットランドは棄権し，イングランドは全くのサッカー後進国である米国に敗れ，一次リーグでの敗退を余儀なくされた[17]。その結果，英国の大陸諸国へのサッカー的関心が高まり，Youth Football 大会の開催等々，国内の強化努力が積極的に行われ始めた[18]ことに起因すると考える。

以上，概観して来た通り，世界で最も古く，権威あるフットボールリーグであり，かつ信頼出来る記録を保有するF.A.フットボールリーグの得点は減少の傾向を示して来た。又競技規則の改正，増補と戦術的転換の間には密接な因果関係が存在し，この両者が輻輳して得点減に関与したことは，その時間的一致から見て明らかである。

一方，1930年に始ったワールドカップ大会では，次々と新しい技術，戦術が展開され，世界のサッカーは英国中心から汎世界的規模に拡大し，ブラジルを中心とした南米諸国とヨーロッパ諸国との伯仲した対立の中に次の段階を迎える。そこで次章においては，若干年代的差異があるものの，ワールドカップ大会の得点推移の概括を試みることにする。

尚1888年以前の得点に関しては，1873年に始った。International Matches の結果を1887年まで表—2に示した[19]。スコットランドの圧倒的な技術的，戦術的優位を示し，今日的得点結果との比較の参考に供する。

1) Lodziak, Conrad, "*Understanding Soccer Tactics*", Faber, 1966, pp. 29—52.
2) Joy, Bernad, "*Soccer Tactics*", Phoenix, pp. 51—56. 尚戦術論については Weisweiler, Hennes, "*Der Fussball*," Hofmann, 1968, pp. 47—90 が詳しい。
3) The F.A., The Football Association Year Book 1966—67, p. 23.
4) Ibid., p. 22.
5) 1863年，ロンドン市周辺の11のフットボールクラブが集り，The Football Association を創設，同年規約及び競技規則を統一し印刷，発行した。この協会制定の規則によるフットボールを Association Football と呼んだ。

6) The F.A., The Football Association Year Book 1965—66, pp. 60—61.
7) Ibid., p. 60.
8) Ibid., p. 61.
9) Ibid.
10) Golesworthy, Maurice, Article on "Law of the Game", *The Encyclopaedia of Association Football*, Robert Hale, 1973, pp. 129—137.
11) 多和健雄, "競技規則の変遷", 多和健雄他編著,「サッカーのコーチング」, 大修館, 1974, p. 30.
12) 前掲書 pp. 28—52.
13) 前掲書 p. 47.
14) Delaney, Terence, "*A Century of Soccer*," Heinemann, 1963, p. 59.
15) United Kingdom は England, Scottland, Wales, Ireland の4地域に区別され, それぞれの地域同志の試合も国際競技会として扱われている。1873年 The Scottish F.A., 1876年 The F.A. of Wales, 1880年 The Irish F.A. が創設されている。
16) Delaney, Terence, op. cit., pp. 135—136. 尚 F.I.F.A. への復帰は1946年である。
17) Ibid.
18) Ibid., pp. 136—139.
19) The F.A., The Football Association Year Book 1974—75, pp. 26—27.

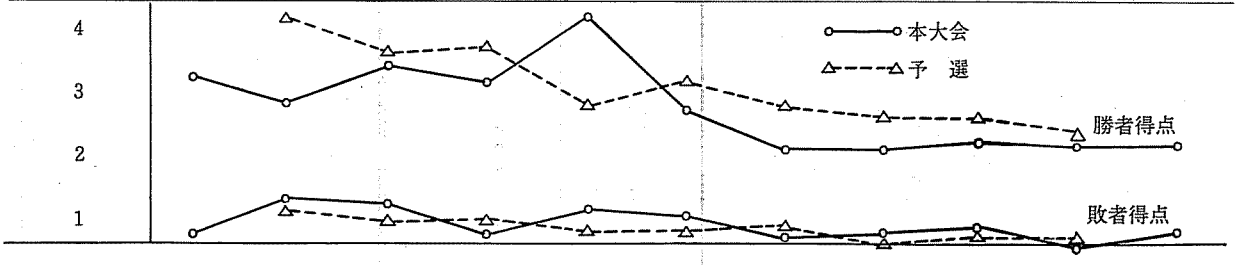
(3)

表—3は, ワールドカップ予選及び本大会 (Final Competition) の得点記録を, オルドジッフ・ジュルマン著, 大竹国弘訳,「世界サッカー史」及び「World Soccer」誌 Vol. 13, 14, 15, 16, 朝日新聞縮刷版, 昭和23年から54年までのワールドカップ大会に関する記述の内から得点記録を抜萃し分類整理したものである。図—2は, この表に従い縦軸に一試合当りの平均得点 (Goal per Matches), 勝者得点と敗者得点の差 (Goal Difference), 及びその比率 (Goal Average) を示し, 横軸に年度を示した。

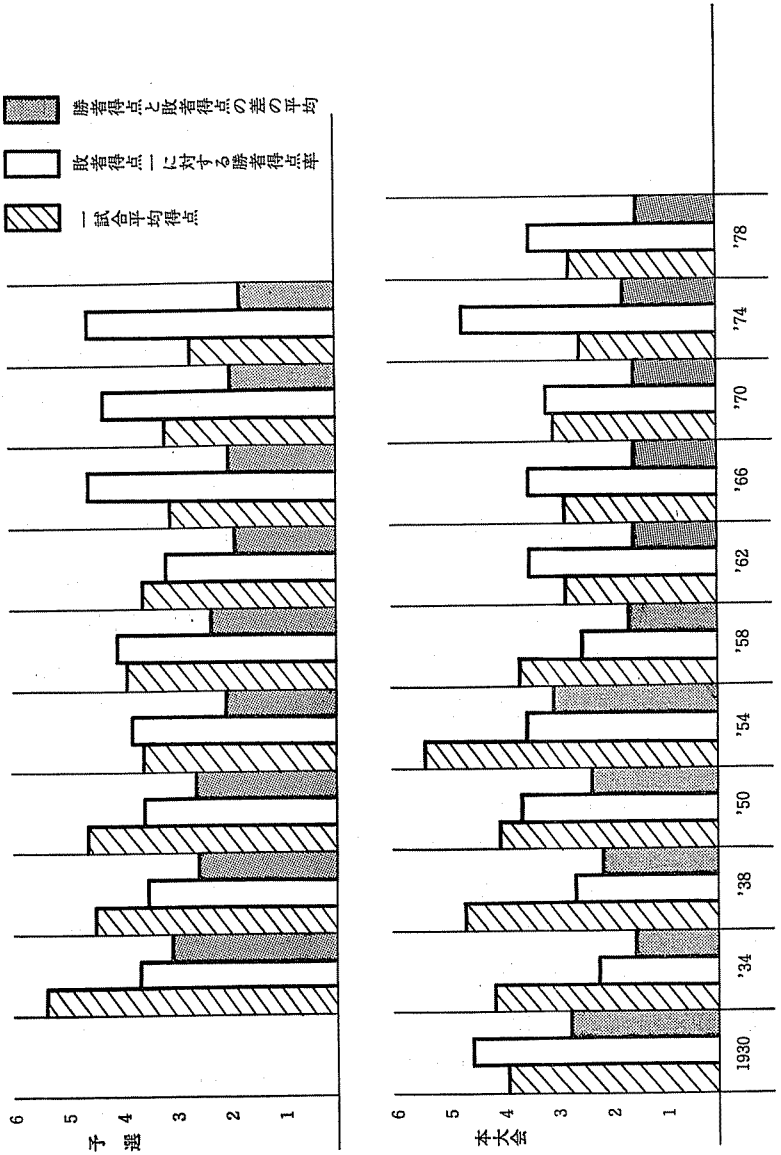
以下は, この表及び図の検討を通して, 戦術的転換が守備的側面に対して, より積極的に作用した具体的な現象を明確にすること, 及びワールドカップ大会の得点又は平均得点の年次的推移に関する法則性の基礎的な資

表—3　ワールドカップ大会試合結果　1930—78年　（上段に本大会 下段に予選）

		1930年	1934	1938	1950	1954	1958	1962	1966	1970	1974	1978
試合数		18 —	17 26	18 20	22 26	26 57	33 88	32 94	32 126	32 171	38 224	38
得点	勝	59 —	48 110	61 71	69 95	109 163	90 273	69 259	69 320	72 437	80 509	79
	敗	11 —	22 30	23 20	19 26	31 43	36 67	20 80	20 69	23 102	17 110	23
	計	**70** —	**70** **140**	**84** **91**	**88** **121**	**140** **206**	**126** **340**	**89** **339**	**89** **389**	**95** **539**	**97** **619**	**102**
平均	勝	3.23 —	2.82 4.23	3.39 3.55	3.14 3.65	4.19 2.86	2.61 3.10	2.03 2.76	2.03 2.54	2.12 2.56	2.08 2.27	2.08
	敗	0.72 —	1.29 1.15	1.28 1.00	0.86 1.00	1.19 0.75	1.03 0.76	0.59 0.85	0.59 0.55	0.68 0.59	0.45 0.49	0.61
	計	**3.89** —	**4.12** **5.38**	**4.67** **4.55**	**4.00** **4.65**	**5.38** **3.61**	**3.65** **3.86**	**2.78** **3.61**	**2.78** **3.09**	**2.97** **3.15**	**2.53** **2.74**	**2.68**
勝得点/敗得点		4.54 —	2.18 3.67	2.65 3.55	3.63 3.65	3.52 3.79	2.54 4.07	3.45 3.24	3.45 4.64	3.13 4.28	4.65 4.63	3.43
引分（%）		—	1(5.88) 4(15.38)	3(16.67) 3(15.00)	3(13.63) 6(23.08)	2(7.69) 9(15.79)	10(29.41) 12(13.64)	5(15.63) 17(18.09)	5(15.63) 19(15.08)	5(15.63) 35(20.47)	10(26.32) 57(25.45)	9(23.68)
0：0（%）		—	—	—	0 1(2.85)	0 3(5.06)	2(6.06) 5(5.68)	4(12.50) 8(8.51)	3(9.38) 10(7.94)	3(9.38) 13(7.60)	5(13.16) 27(12.05)	6(15.79)



図—2　ワールドカップ大会本大会，予選の平均得点，平均点差及び得失点比率



料を得ることを意図している。

尚本大会と予選を区別して示している理由は，その試合方式の根本的相違による。即ち予選においては，参加国を幾つかの地域に分割し，本大会までの約４ケ年間でホーム・アンド・アウェイ (Home and Away) 方式を原則として，その地域代表を決定するのに対して，本大会では次の如き試合方式の変化が認められる。

全参加チームを４組に区分し１次リーグを行い，その勝者によって準決勝，決勝が行われた1930年大会に始まり，完全なノック・アウト方式（トーナメント方式）の'34年大会，'38年大会，１次リーグ４組の勝者による決勝リーグ方式の'50年大会，４組の１次リーグの上位２チームによる決勝トーナメント方式の変型である'54年大会，決勝トーナメント方式の'58年から'70年大会までを経て，'74年大会の１次リーグ４組各６試合，２次リーグ２組各６試合，決勝，三位決定戦の計38試合による現行の方式に至っている[1]。この試合方式の変更が得点推移に関与した顕著な例を示せば次の通りである。即ち1958年大会における引分け10試合（29.41%）は史上最高値であるが，これは１次リーグにおいて同勝点の場合は得失点差ではなく，プレーオフで上位を決定したことに関連する。事実１次リーグ全４組の内３組までがプレーオフを行っている[2]。

以下は検討を個条に示したものである。

1　１試合当りの平均得点は漸減の傾向にある（図―２参照）。特に予選において，その傾向は顕著である。

2　勝者得点に関しては予選記録で本大会記録を上回り，敗者得点では若干であるがその逆の傾向を示す（表―３）。

3　1958年本大会，1962年予選から平均得点減の傾向は，より顕著である。又同時期から敗者得点１に対する勝者得点の比率は，より高くなり今後増々拡大する傾向があるのに対し，平均点差に大きな変動は認められない（図―２）。

4　1966年大会以後には本大会，予選共に大きな変動は認められないが，

引分け試合が若干増加している（表―３）。即ち1974年大会予選では224試合中57試合（25.45%）が引分けで，内27試合（12.25%）が０：０である。

以上に関して若干の知見を述べれば次の通りである。即ち平均得点が減少して来ているのは疑いのない事実であり，この傾向は今後共進展する可能性が高い。敗者得点１に対する勝者得点が漸増していること，及び平均点差が接近しつつある事実がないことを理由として，この平均得点減に，より積極的に関与しているのは敗者得点の減少であると考える。即ち敗者が全く得点出来ない試合が漸増していると言える。

本大会と予選の双方に比較的類似した傾向が認められるが，これは予選参加国が1974年大会には112ケ国に達したこと，又ワールドカップ大会予選への参加が比較的容易であることを考えると驚異的事実と認めざるを得ない。即ち上述の理由で予選ではチーム間の格差は本大会より大きく，従って点差は，より拡大すると考えるのが一般的であるが，事実は相違している。従って敗者得点が減少している現象はチーム間格差が拡大された結果ではなく，勝者におけるセフティー・ファースト・タクティクス (Safety First Tactics) [3] が惹起した結果と見ることが妥当である。

即ち1958年大会において，ブラジルチームによって示された４：２：４システムの完成[4] と平均得点減は時期的に完全に一致する。ブラジルはこれまでのWM型システムの対人防禦を基本とする戦術から，守備側の数的優位を基本とする地域防禦を基盤に，優れた個人技術の攻撃的手段で得点を狙う全く新しい戦術的転換を示したのである[5]。

この時点から明らかに平均得点は減少し，敗者得点１に対する勝者得点の比率は高まって行く。更に引分け試合の増加現象を重複させるとチーム間格差が守備的側面においてのみ近接する傾向が明らかになる。

1966年大会では４：３：３システムを採用するチームが多くなった[6]。これは前大会の南米勢，特にペレに代表される個人技術の卓越した選手に対する対人防禦の限界を認めたヨーロッパ勢の多用したものである。

表—4　ワールドカップ大会本大会勝敗別得点と点差　（実数—%）

11											
10											
9					1- 3.85					1- 2.63	
8			1- 5.56	1- 4.55	1- 3.85						
7		1- 5.88		1- 4.55	4-15.38	1- 2.94				1- 2.63	
6	3-16.67		2-11.11	1- 4.55	1- 3.85	2- 5.88	1- 3.12				2- 5.26
5		1- 5.88	1- 5.56	1- 4.55	2- 7.69	2- 5.88	1- 3.12	2- 6.25	1- 3.12		1- 2.63
4	5-27.78	1- 5.88	3-16.67	2- 9.09	7-26.92	2- 5.88	2- 6.25	2- 6.25	7-21.88	4-10.53	1- 2.63
3	5-27.78	7-41.18	4-22.22	5-22.72	3-11.54	8-23.53	8-25.00	6-18.75	7-21.88	5-13.16	11-28.94
2	1- 5.56	4-23.53	5-27.78	9-40.91	4-15.38	11-32.35	10-31.25	14-43.75	4-12.50	11-28.95	8-21.05
1	4-22.22	3-17.65	2-11.11	2- 9.09	3-11.54	7-20.00	6-18.75	5-15.63	10-31.25	11-28.05	9-23.68
0						2- 5.88	4-12.50	3- 9.36	3- 9.36	5-13.16	6-15.78
年	1-1930	2-1934	3-1938	4-1950	5-1954	6-1958	7-1962	8-1966	9-1970	10-1974	11-1978
0	10-55.56	3-11.76	4-22.22	9-40.91	10-38.46	13-38.24	16-50.00	15-46.88	16-50.00	23-60.53	18-47.36
1	6-33.33	8-47.06	9-	7-31.81	7-26.92	11-32.35	14-43.75	15-46.88	10-31.25	13-34.21	17-44.73
2	1- 5.56	7-41.18	3-16.67	6-27.27	6-23.08	8-23.53	1- 3.12	1- 3.12	5-15.63	2- 5.26	3- 7.89
3	1- 5.56		1- 5.56		1- 3.85	3- 8.82		1- 3.12	1- 3.12		
4					1- 3.85		1- 3.12				
5			1- 5.56		1- 3.85						
9					1- 3.85					1- 2.63	
8			1- 5.56	1- 4.55							
7					2- 7.69					1- 2.63	
6		1- 5.88	1- 5.56	1- 4.55							5- 5.26
5	2-11.11			1- 4.55	5-19.23	1- 2.94	2- 6.25	1- 3.12			
4	3-16.67		1- 5,56	1- 4.55		3- 8.82		1- 3.12	1- 3.12	1- 2.63	1- 2.63
3	5-27.78	1- 5.88	1- 5.56	3-13.63	3-11.54	5-14.71	1- 3.12	2- 6.25	7-21.87	5-13.16	3- 7.89
2	3-16.67	3-17.65	6-33.33	6-27.27	8-30.77	6-17.65	12-37.50	11-34.37	5-15.63	8-21.05	8-21.05
1	5-27.78	11-64.71	5-27.78	6-27.27	5-19.23	10-29.41	12-37.50	12-37.50	14-43.75	12-31.58	15-39.47
0		1- 5.88	3-16.67	3-13.63	2- 7.69	10-29.41	5-15.63	5-15.63	5-15.63	10-26.32	9-23.68

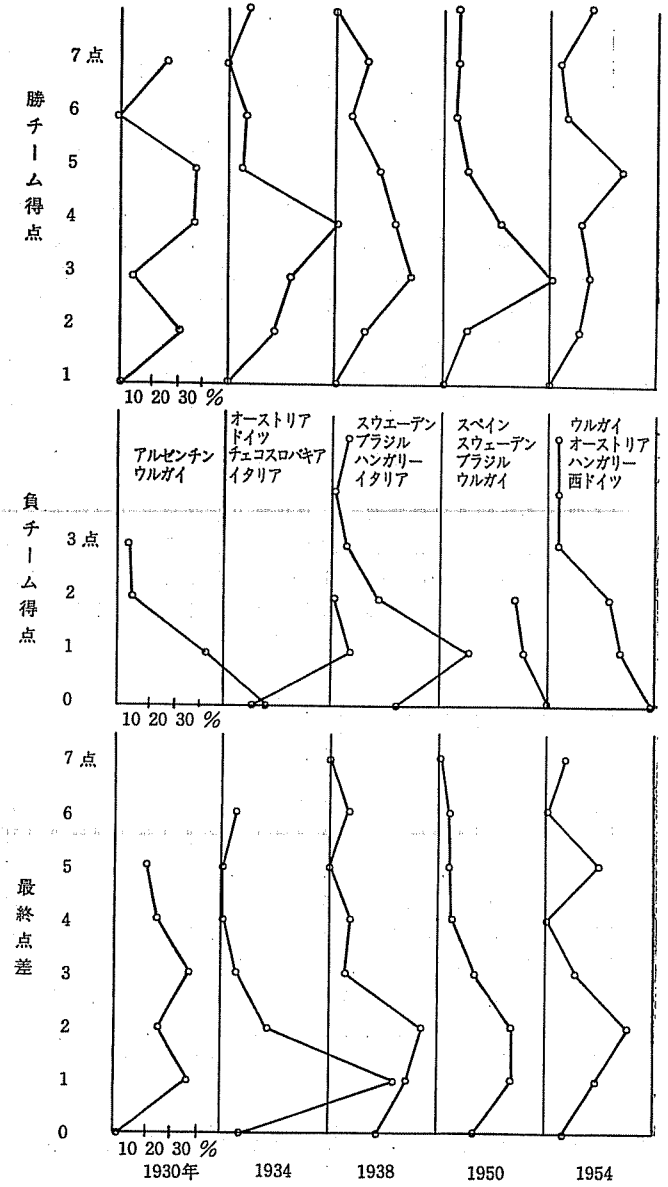
注　年度をはさんで上段に勝チームの得点，下段に負チーム得点，更にその下に最終点差を示してある。尚実数は当該チーム数及びその比率である。

表—5　ワールドカップ大会予選勝敗別得点と点差　（実数—%）

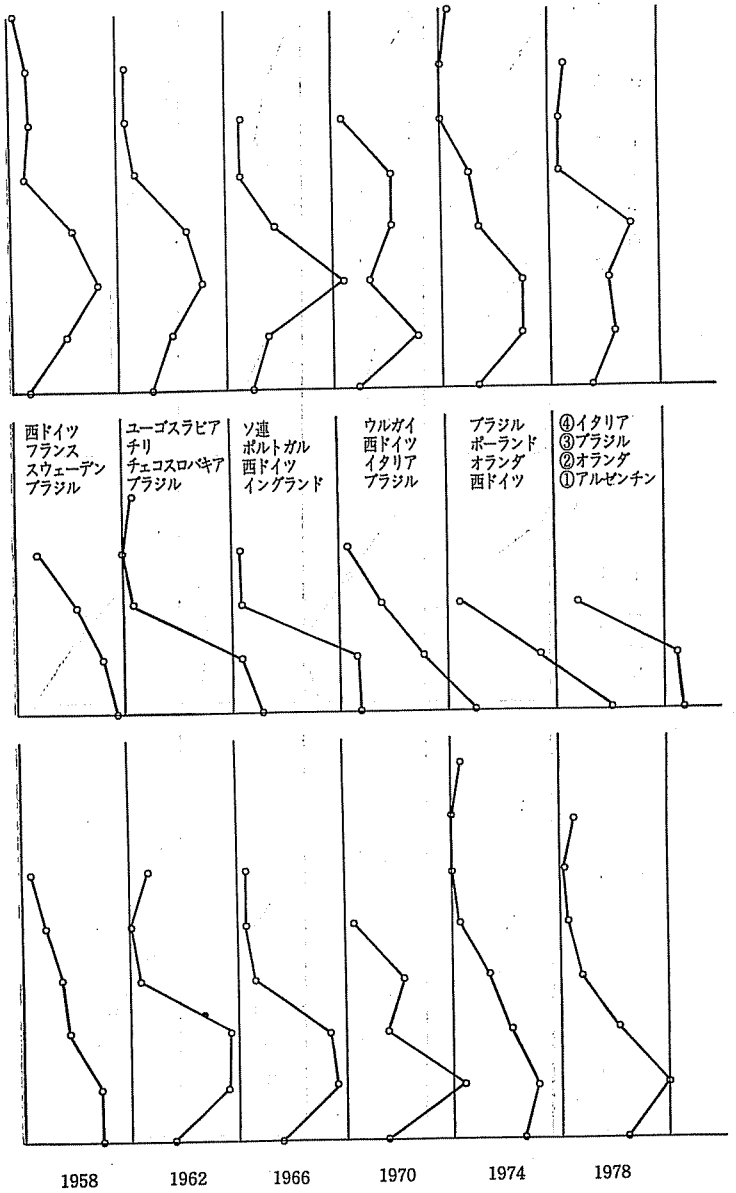
11			1- 5.0						1- 0.58	1- 0.45	
10						1- 1.13					
9		2- 7.69		1- 3.85	1- 1.75		1- 1.06		1- 0.58	2- 0.89	
8				1- 3.85	2- 3.51	2- 2.27		1- 0.79	2- 1.17	2- 0.89	
7		1- 3.85	1- 5.0	1- 3.85	0-	3- 3.41	2- 2.13	3- 2.38	1- 0.58	2- 0.89	
6		4-15.38	1- 5.0	3-11.54	1- 1.75	3- 3.41	5- 5.32	8- 6.35	7- 4.09	5- 2.23	
5		2- 7.69	1- 5.0	4-15.38	4- 7.02	8- 9.09	5- 5.32	7- 5.56	7- 4.09	8- 3.57	
4		8-30.17	5-25.0	1- 3.85	10-17.54	14-15.91	14-14.89	12- 9.52	19-11.11	25-11.16	
3		2- 7.69	4-20.0	6-23.08	12-21.05	17-19.32	18-19.15	19-15.08	33-19.29	25-11.16	
2		6-23.08	3-15.0	3-11.54	12-21.05	24-27.27	26-27.66	34-26.98	51-29.82	73-32.59	
1		1- 3.89	4-20.0	5-19.23	12-21.05	13-14.77	19-20.21	35-27.78	39-22.81	59-26.34	
0				1- 3.85	3- 5.26	3- 3.41	4- 4.26	7- 5.56	10- 5.84	22- 9.82	
年	1-	2-1934	3-1938	4-1950	5-1954	6-1958	7-1962	8-1966	9-1970	10-1974	11-1978
0		6-23.08	7-35.0	9-34.62	27-47.37	38-43.18	39-41.49	68-53.97	92-53.80	136-60.71	
1		12-46.15	8-40.0	8-30.77	19-33.33	36-40.90	36-38.29	48-38.09	58-33.92	69-30.80	
2		7-26.92	3-15.0	9-34.62	9-15.79	11-12.50	14-14.89	9- 7.14	19-11.11	16- 7.14	
3			2-10.0		2- 3.51	3- 3.41	4- 4.26	1- 0.79	2- 1.17	3- 1.34	
4		1- 3.89					1- 1.06				
5											
10			1- 5.0			1- 1.13			1- 0.58	1- 0.45	
9		1- 3.89					1- 1.06			2- 0.89	
8		1- 3.89			3- 5.26	1- 1.13		1- 0.79	2- 1.17	1- 0.45	
7				2- 7.69		2- 2.27	1- 1.06	2- 1.59	1- 0.58	3- 1.34	
6		2- 7.69	1- 5.0	3-11.54		1- 1.13	4- 4.26	3- 2.38	5- 2.92	5- 2.23	
5		3-11.54	1- 5.0		1- 1.75	4- 4.55	3- 3.19	10- 7.94	4- 2.34	6- 2.68	
4		2- 7.69	4-20.0	2- 7.69	8-14.04	8- 9.09	5- 5.32	3- 2.38	12- 7.02	19- 8.48	
3		5-19.23	1- 5.0	6-23.08	5- 8.77	21-23.86	12-12.76	17-13.49	26-15.20	16- 7.14	
2		4-15.48	3-15.0	4-15.38	13-22.80	15-17.05	17-18.09	27-21.43	39-22.81	45-20.09	
1		4-15.38	6-30.0	3-11.54	18-41.57	23-26.14	34-36.17	44-34.92	46-26.90	69-30.80	
0		4-15.38	3-15.0	6-23.08	9-15.79	12-14.64	17-18.09	19-15.08	35-20.47	57-25.45	

注　年度をはさんで上段に勝チーム得点，下段に負チーム得点
更にその下に最終点差を示してある。尚実数は当該チーム数及びその比率である。

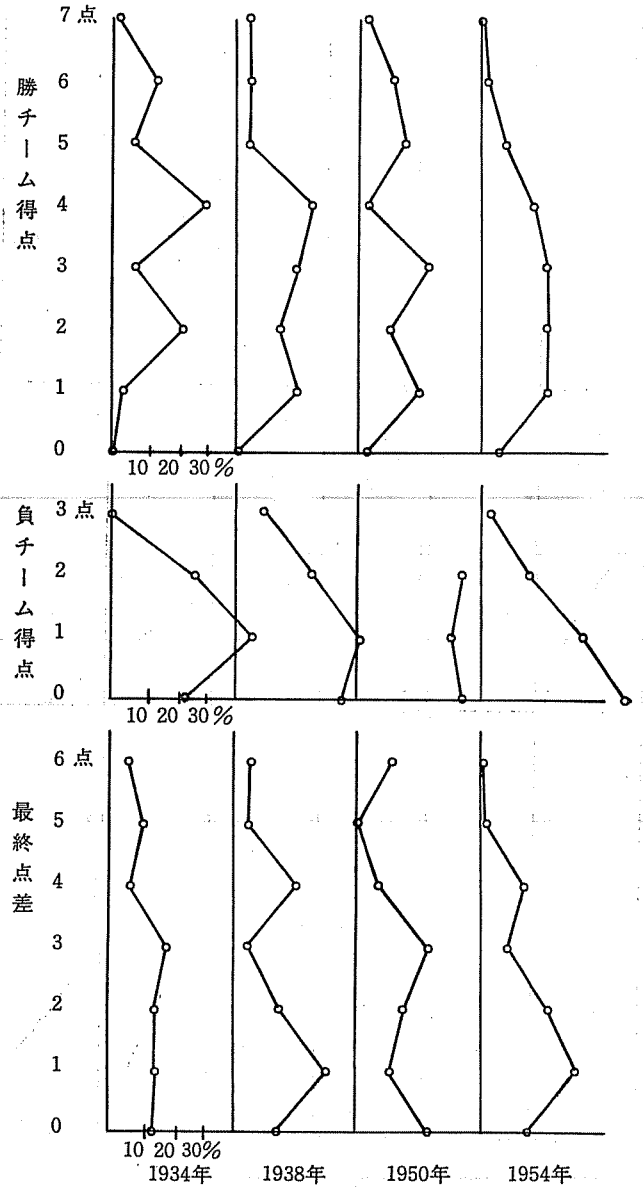
図—3　ワールドカップ本大会



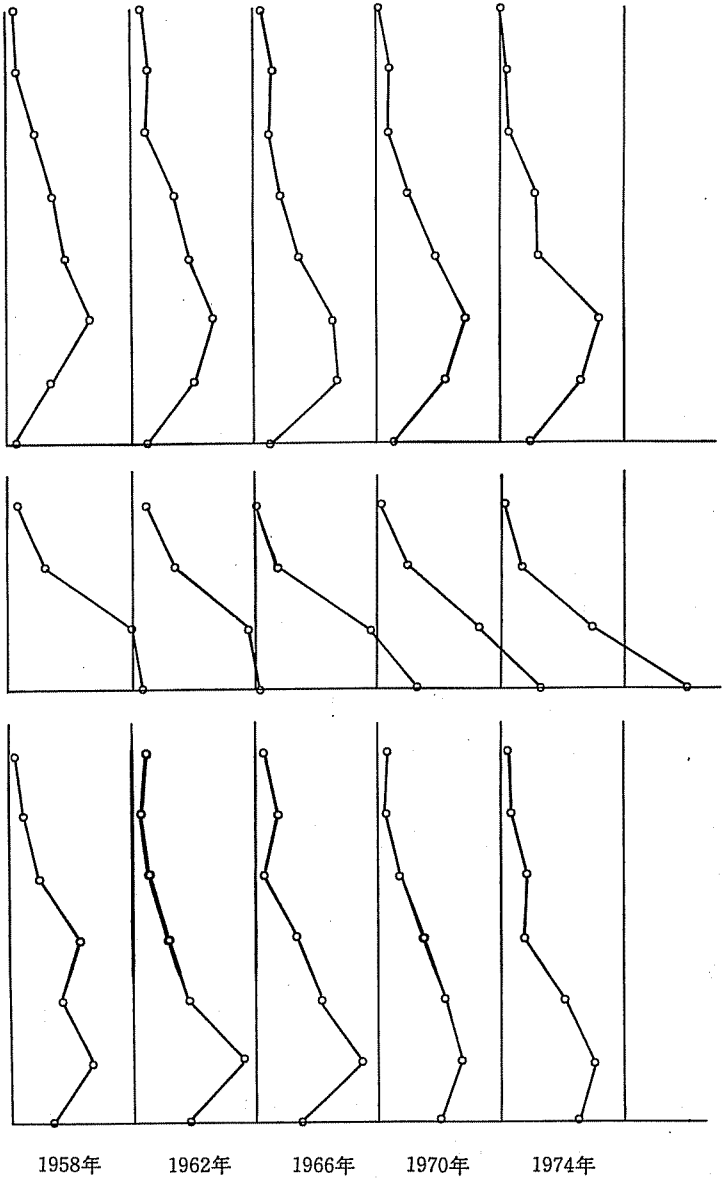
勝敗別得点及び点差のプロフィール



図—4　ワールドカップ予選勝敗別



得点及び点差のプロフィール



次に平均得点減の内容について若干の吟味を行う。

表―4及び表―5は，ワールドカップ本大会及びその予選の全得点について年度，勝敗，点差別の実数及びその百分比を示したものであり，図―3及び図―4のプロフィールと合せて基礎的資料の抽出及びそれに関連する法則性の検出を意図している。

1　本大会と予選のプロフィールは，その試合方式の相違にも拘らず顕著な近似性を認め得るが，若干本大会の勝者得点に差が生じているのは，上位4チームの影響が特に顕著である事由に依る。即ち例示すれば1974年大会の全38試合の内，上位4チームが関与した試合数は24（63.15%）である。

2　年度的には1958年を境に全てのプロフィール（予選では1962年度）に大きな変化が発現する。

3　敗者得点0の試合は予選，本大会共に激増している。1950年予選では26試合中9試合，比率にして34.62%程度であったものが，1974年には224試合中136試合，比率にして実に60.71%に達している。又敗者得点2の試合は1950年予選では26試合中9試合，比率にして34.62%であったものが，1974年には224試合中16試合，比率7.14%にしか達していない。更に1974年及び1978年本大会における敗者の62―94%以上が得点0又は1であることは注目すべきである。又平均点差も1950年当時には点差0，即ち引分け試合が26試合中6試合（23.08%）であったものが1974年には224試合中57試合（25.45%）と若干の増加を示している。この一連の増減は比率こそ相違するが予選，本大会に共通の現象である。

4　予選における勝者の最多頻度の得点は2点である。1958年まではその頻度順に2点，3点，1点であったものが，1962年には1点と3点が同比率となり，1966年には2点，1点，3点の順になっているが，0点（便宜上勝者得点0点としているがこれは0：0引分けを意味している）の激増及び3点以上の得点の激減を考慮すると，この傾向は今後共増々助長されると見るのが妥当である。

5　予選では勝者得点0（即ち0：0）の比率が増加し，ほぼ同時期から勝者得点1も増加している。即ち最少得点による効率的勝利の傾向が強くなっている。

以上の結果から若干の知見を述べると，まず予選と本大会では，本大会の試合方式から勘案して予選記録に最も一般的な傾向を認めるのが妥当である。但し優れた戦術の成功が本大会で実証せられた時から若干の時間的経過が必要であると考える。本大会プロフィールの1958年から'70年までの近似性，1974年及び78年の近似性は試合方式の同一性に起因する。又ノックアウト方式では得点が増加し，リーグ形式では減少するという一般的傾向は，ワールドカップ大会の場合特に顕著である。

平均得点が減少して来ている現象が，勝者得点3以上の試合が激減し，敗者得点0又は1が激増して来ていることに起因することは先述の通りであるが，更に加えて点差に大きな変動が認められないことは即ち試合における守備的側面の進展と考えるのが妥当である。

要約すれば戦術的転換及び平均得点減少の極めて特徴的な変動とは，時期的に完全に一致しているから戦術的転換の結果が平均得点減という現象を惹起したとする主張は妥当な結論であり，この戦術的転換は守備的側面に，より能動的に作用し，この傾向は今後も消滅することはないと言える。

チーム間の格差については，その試合結果の頻度別分布状況を検討することによって明らかに出来ると考え，表―6にそれを示した。

これは予選の得点を年度別，勝敗別に比率にして示し，その試合結果の分布状況も明らかにせんと意図したものである。尚横軸に勝者得点，縦軸に敗者得点をとり，それを結んで頻度を比率にして示してある。

この表を一見して判る通り必勝点は3点である。1934年，グループ11・アイルランドv．ベルギー及び1962年，グループ14・グァテマラv．コスタリカ，の2例にのみ4：4の引分けが記録されている。又3点をとって敗れた例は1954年，5：3（グループ4・アイルランドv．フランス），

表—6　ワールドカップ予選得点分布比率（%）

	勝負	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	
1974年	0	9.8	16.5	15.6	4.9	7.5	2.2	1.7	0.8	0.4	0.8			60.71	224試合
	1		9.8	12.5	3.1	2.6	1.3	0.4		0.4				30.80	
	2			4.4	1.7	0.8								7.14	
	3				1.3									1.34	
	計	9.8	26.3	32.5	11.1	11.1	3.5	2.2	0.8	0.8	0.8				
1970年	0	5.8	13.4	14.6	10.5	4.0	1.7	2.3		0.5				53.8	171試合
	1		9.3	11.1	5.2	4.0	1.7	0.5	0.5	0.5	0.5			33.9	
	2			4.0	2.3	2.9	0.5	1.1						11.1	
	3				1.1									1.1	
	計	5.8	22.8	29.8	19.2	11.1	4.0	4.0	0.5	1.1	0.5				
1966年	0	5.5	18.8	11.9	6.3	1.5	3.9	2.3	1.5	0.7				53.9	126試合
	1		7.9	13.4	7.1	5.5	0.7	3.1						38.0	
	2			1.5	1.5	2.3	0.7		0.7					7.1	
	3							0.7						0.7	
	計	5.5	27.7	26.9	15.0	9.5	5.5	6.3	2.3	0.7					
1962年	0	4.2	10.6	9.5	6.3	3.1	2.1	3.1	1.0		1.0			41.4	94試合
	1		9.5	17.0	3.1	4.2	2.1	1.0	1.0					38.2	
	2			1.0	7.4	5.3	1.0							14.8	
	3				2.1	1.0		1.0		(4.4)	1.0			4.2	
	計	4.2	20.2	27.6	19.1	14.8	5.3	5.3	2.1		1.0				
1958年	0	3.4	5.6	11.3	10.2	4.5	2.2	1.1	2.2	1.1		1.1		43.1	88試合
	1		9.0	14.7	4.5	9.0	3.4							40.9	
	2			1.1	4.5	1.1	3.4	1.1	1.1					12.5	
	3					1.1		1.1		1.1				3.4	
	計	3.4	14.7	27.2	19.3	15.9	9.0	3.4	2.2		1.1				
1954年	0	5.2	19.2	7.0	3.5	8.7				3.5				47.3	57試合
	1		1.7	7.0	10.5	5.2	5.2	1.7			1.7			33.3	
	2			9.0	5.2	3.5								15.7	
	3				1.7		1.7							3.5	
	計	5.2	21.0	21.0	21.0	17.5	7.0	1.7		3.5	1.7				
1950年	0	3.8	3.8	7.6	7.6			7.6	3.8					34.6	26試合
	1		15.3		7.6	3.8	3.8							30.7	
	2			3.8	7.6		11.5	3.8		3.8				34.6	
	3										3.8				
	計	3.8	19.2	11.5	23.0	3.8	15.3	11.5	3.8	3.8	3.8				
1938年	0		10.0	5.0		15.0		5.0						35.0	20試合
	1		10.0	10.0	5.0	5.0	5.0						5.0	40.0	
	2				10.0	5.0			5.0					15.0	
	3				5.0									10.0	
	計		20.0	15.0	20.0	25.0	5.0	5.0	5.0				5.0		
1934年	0		3.8	3.8		3.8	3.8	3.8			3.8			23.0	26試合
	1			11.5	3.8	15.3		7.6	3.8		3.8			46.1	
	2			7.6	3.8	7.6	3.8	3.8						26.9	
	3					3.8								3.8	
	計		3.8	23.0	7.6	30.1	7.6	15.3	3.8		7.6				

1958年，4：3（グループ14・インドネシアｖ．中国），6：3（グループ2・フランスｖ．ベルギー），8：3（グループ2・ベルギーｖ．アイルランド），1962年，4：3（グループ3・アイルランドｖ．西ドイツ），6：3（グループ11・アルゼンチンｖ．エクアドル），1966年，6：3（グループ10・ペルーｖ．ベネズェラ），の計7例が記録されているのみである[7]。

1958年には4点以上とって勝ったチームが34.5%にも達していたのが'62年27.9%，'66年23.6%，'70年20.7%，'74年18.3%と次第に減少しつつあり，チーム間の格差は次第に縮少される傾向が認められるが，これは大量得点が難しくなったことを意味し，最多頻度順の比率にはチーム間格差の縮少は必ずしも現れていないことに注目したい。

1) 以上の試合方式に関する記述は全て下記による。オルドジッフ・ジュルマン著，大竹国弘訳，岡野・鈴木・牛木・監修，「世界サッカー史」，ベースボールマガヂン，1977，pp. 41—162.
2) Ibid., pp. 102—103.
3) Joy, Bernard, "*Soccer Tactics*," Phoenix, 1963, pp. 34—35.
4) Weisweiler, Hennes, "*Der Fussball*," Hofmann, 1968, pp. 69—80.
5) Ibid.
6) Ibid.
7) オルドジッフ・ジュルマン，前掲書 pp. 181—219.

（4）

J. ホイジンガは勝つ[1]ということを「遊戯の終りに当って自分が優越者であることを証明してみせること」[2]，であり「その優越性の効力は押し広げられ，勝者の得た尊敬，帯びた名誉は勝者の所属しているグループ，関係者の全体に及ぼされてゆく傾向がある」[3]と述べている。

ここでは，Home Team と Away Team の勝率及び先取得点の価値に関する興味ある報告[4]に接したので本稿で日英の比較の立場からこれをとりあげる。

表—7は，The Football Association Yearbook 1966—67 p. 89 に

表—7 MATCHES IN WHICH THE HOME TEAMS OPENED THE SCORING

Period of game in which first goal was scored (minutes)	Home team won by: 7	6	5	4	3	2	1	Draw 0	Away team won by: 1	2	3	4	5	Total Goals	% in each period of: Home wins	Draws	Away wins
76—90						1	11	4						16	75.0	25.0	0
61—75					1	12	14	4						31	87.1	12.9	0
46—60				3	9	10	24	8	3	1				58	79.3	13.8	6.9
31—45			1	8	11	28	26	14	6	2				96	77.1	14.6	8.3
16—30	1		4	12	22	36	39	31	7	1	1			154	74.0	20.1	5.9
1—15	2	2	11	27	38	46	40	37	19	12	1			235	70.6	15.8	13.6
Totals	**3**	**2**	**16**	**50**	**81**	**133**	**154**	**98**	**35**	**16**	**2**			**590**	**74.4**	**16.6**	**9.0**

MATCHES IN WHICH AWAY TEAMS OPENED THE SCORING

Period of game in which first goal was scored (minutes)	Away team won by: 7	6	5	4	3	2	1	Draw 0	Home team won by: 1	2	3	4	5	Total Goals	% in each period of: Away wins	Draws	Home wins
76—90					1	1	10	3						15	80.0	20.0	0
61—75					2	2	9	8	2					23	56.5	34.8	8.7
46—60						3	15	6	1		1			26	69.2	23.1	7.7
31—45				3	3	7	12	15	13	4	1			58	43.1	25.9	31.0
16—30				2	9	15	27	21	14	10	4		1	103	51.5	20.4	28.1
1—15			3	4	11	27	40	56	24	14	5		1	185	45.9	30.3	23.8
Totals			**3**	**9**	**26**	**55**	**113**	**109**	**54**	**28**	**11**		**2**	**410**	**50.2**	**26.6**	**23.2**
	645							207	148					1000	64.5	20.7	14.8

"The Value of the First Goal" と題して掲載されたもので，1964—65年に行われた1000試合に及ぶ，Football League 及び F.A. Cup において少くとも1点以上得点が記録された試合についての先取全得点を集計したものである。又表—8は1968年から1977年までの日本サッカーリーグ第一部の試合について，少くとも1点以上得点のあった674試合を，日本サッカーリーグ年鑑[5]から抽出し表—7にならって作表したものである。

以下表—7及び表—8を比較的に検討した結果について述べる。

(1) 試合の時間的経過の早い時期に先取得点した場合は，最終的に点差がひらく場合が多く，遅い時期の先取得点になればなる程，高い勝率を示す。特にホームチームが後半の半ば以後に先取得点した場合の勝率が高い。

(2) イングランドでは圧倒的にホームチームが有利（先取得点した場合の勝率74.4%，又先取得点されても49.8%の勝率をあげている）であるが，日本ではホーム，アウェイによる有利さは殆どない。これは1978年現在，東京をホームとするチームが，第一部に加盟する10チーム中6チームもある変則的現状から当然である。

日本サッカーリーグ小事典によれば，「アウェイでは守備を固め，ホームでは大量点を狙うのが常識だが，日本では各チームが自分のグランドで競技するのでないから，それ程地元が有利とはいえない」[6]という記述があるが上記の結果はこれを裏づけている。

(3) 日本リーグでは，ホーム，アウェイの何れについても前半30分から後半30分までの先取得点は，引分けが他の時間帯よりも多い。

前半を0：0で経過した試合については，後半に先取得点をあげたチームが約90%の引分け又は勝利の可能性を示す。これはハーフタイムにおける選手の精神的，身体的調整が非常に重要な価値をもつことを意味する。

(4) イングランドはアウェイチームの先取得点に特徴がある。引分率の高さ，前半で先取得点した場合の勝率の低さ，ホームチームが逆転する可能性の高さ等である。

(5) 日，英共に先取得点の75%—80%は前半にあげられている。これは前

表—8　　ホームチーム　先取得点試合　　1968—77年日本サッカーリーグより。

最終得点差	ホームチームの勝試合 9	8	7	6	5	4	3	2	1	引分 0	アウェイチームの勝試合 1	2	3	4	5	計	ホーム 勝	引分	アウェイ 勝 %
76分—90分								4	11	1	2					18	83.3	5.5	11.1
61 —75						1		4	12	4						21	80.9	19.0	0
46 —60						2	4	11	14	10	4					45	68.8	22.2	8.8
31 —45				1	3	2	7	8	18	12	2	2	1			56	69.6	21.4	8.9
16 —30				3	4	8	16	21	20	16	10	3		1		102	70.5	15.6	12.7
0 —15				3	3	6	15	26	25	15	10	5	4		1	113	69.0	13.2	16.8
計				7	10	19	42	74	100	58	28	10	5	1	1	355	70.9	16.3	12.6

アウェイチーム先取得点試合

最終得点差	アウェイチームの勝試合 9	8	7	6	5	4	3	2	1	引分 0	ホームチームの勝試合 1	2	3	4	5	計	アウェイ 勝	引分	ホーム 勝 %
76分—90分							1	2	11	0						14	100	0	0
61 —75						1	3	3	8	5	2					22	68.1	22.7	9.0
46 —60						3	4	9	14	11	2	2		1		46	65.2	23.9	8.6
31 —45				1		3	3	6	20	9	3	1	1			47	70.2	19.1	10.6
16 —30				1	3	5	9	17	20	11	6	3	1			76	72.3	14.4	13.1
0 —15	1		2	7	5	6	11	20	25	19	9	7	1		1	114	67.5	16.6	15.7
計	1		2	9	8	18	31	57	98	55	22	13	3	1	1	319	70.2	17.2	12.5
総　計	476									113			85			674	70.6	16.7	12.6

半を0：0で過したチームは，後半に先に点をとれば75—80％以上勝てることを意味している。

(6) 最後の15分間の先取得点については，イングランドの引分率の高さ，日本リーグの勝率の高さに注目したい。

このF.A. の報告では「いかなる試合についても，先取得点をあげたチームの方が勝利を得る可能性が高く，試合の可及的早期に先取得点をあげることは精神的有利を保つ上で効果が大きい」[7] と結論している。

では実際にどの時間帯に多く得点されているかを検討してみる。

この図—5は日本サッカーリーグの1969年から1977年の正規の試合時間内に記録された（謂わゆるP.K.戦の得点を含まない），少くとも一点以上得点のあった674試合の得点，2227点について，これを時間別に集計したものを基に作図したものである。

表示された時間は，分単位で記録された，日本サッカーリーグ年鑑の記述によった。

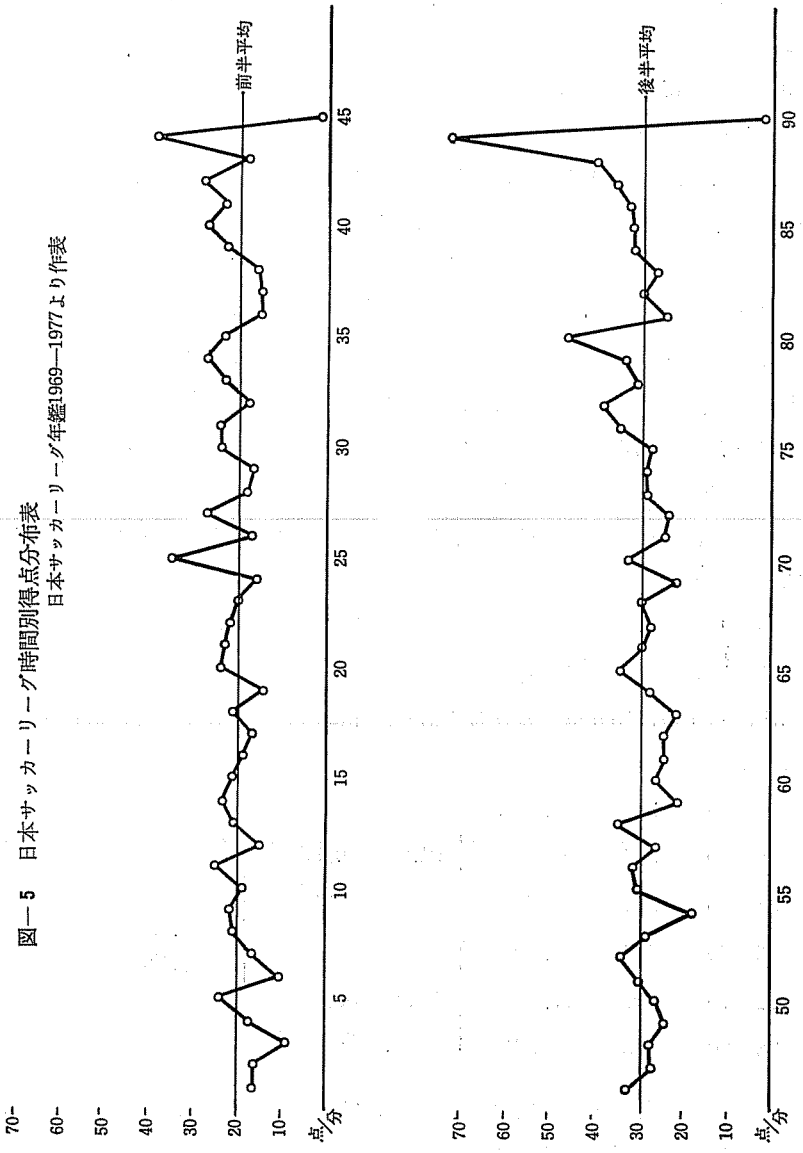
一見して判る通り，前半及び後半の最後にピークがあるが，これはロスタイムの問題を含めて考慮せねばならない。

次に示すのは15分単位の分布であり，先に示した先取得点との対比を図ったものである。

0—15	277点	(12.44％)	912点 (40.96％) 20.27/分	2227点 24.75/分
16—30	314	(14.10％)		
31—45	321	(14.42％)		
46—60	414	(18.59％)	1315点(59.04％) 29.23/分	
61—75	398	(17.88％)		
76—90	503	(22.59％)		

前半と後半との得点頻度の差は，約4：6で後半の得点の方が多いこと，最後の15分間の得点が多いことが目につく。

以下図に従って検討すると，



図—5　日本サッカーリーグ時間別得点分布表
日本サッカーリーグ年鑑1969—1977より作表

(1) まず前半では25分，44分のピークであるが，25分についてはその前後が平均以下であることから，あまり深い意味はないと考える。

(2) 然し39分から44分までは，43分のほぼ平均点に近い得点を除けば，かなり高い頻度があることから，この時間帯の得点期待値は高いと考える。

(3) これとほぼ同様の傾向として，0分から7分まで，やや得点の期待値が低い。

(4) 後半では，84分から89分までの得点期待値が高い。75分以後では，81，82，83分を除いて全て平均以上であることから，従来から言われている最後の15分間に得点の可能性が高いことをうらづけている。その反面59分から75分まで，いわゆる中盤の中だるみを示している。

1) ホイジンガ，J.，高橋英夫訳，ホモ・ルーデンス，中央公論社，1963，p. 96.
2) 前掲書
3) 前掲書
4) The F.A., The Football Association Yearbook 1966—67, p. 89.
5) 日本サッカーリーグ，日本サッカーリーグ年鑑1969—78年年次報告書.
6) 日本サッカーリーグ，日本サッカーリーグ年鑑1978年年次報告書，p. 224.
7) The F.A., op. cit., p. 89.

（5）

表—9はワールドカップの過去の成績を各国別に一覧したものであるが，これに記載した国は二回以上ワールドカップ本戦に出場した国のみを対象とし勝点の多い順に列挙したものである。勝点は勝2点，引分は1点，負0点として合算したもの，勝率は引分けを含んでいる。

この表はワールドカップ史上，即ち世界サッカー史上最も優れた成績を残した国を得点推移の立場から示そうと意図したもので，末尾数字は平均得点，平均失点，ゴールアベレージの順位を合算したものであり，第三章の検討途上で派生的に生じたものであることを付言する。この表はあらゆる意味においてブラジルの世界サッカー界における指導的立場を示している。攻撃を得点，守備を失点で代表させれば西ドイツとイタリア両国の如

表—9 World-Cup 国別総合記録表

	出場	試合	勝数	分数	負数	得点	失点	勝点	勝率（含引分）	平均得点	平均失点	Goal average	順位合計 ベストテン
ブラジル	11	52	33	10	9	119	56	76①	82.70①	2.29③	1.08①	2.13①	5①
西ドイツ	9	47	28	9	10	110	68	65②	78.72②	2.34②	1.45⑪	1.62④	17④
イタリヤ	9	36	20	6	10	62	40	46③	72.22③	1.72⑪	1.11②	1.55⑥	19⑥
ウルガイ	7	29	14	5	10	57	39	33④	65.51⑧	1.96⑥	1.34⑧	1.46⑦	21⑦
アルゼンチン	7	29	14	5	10	55	43	33④	65.51⑧	1.89⑧	1.48⑫	1.28⑩	30⑩
ハンガリー	7	26	13	2	11	73	42	28⑥	57.69⑫	2.81①	1.61⑬	1.74②	16③
スウェーデン	7	28	11	6	11	48	46	28⑥	60.71⑩	1.71⑫	1.64⑭	1.04⑬	39
イングランド	6	24	10	6	8	34	28	26⑧	66.66⑦	1.42⑩	1.16④	1.21⑪	34
ユーゴ	5	25	10	5	10	45	34	25⑨	60.00⑪	1.80⑩	1.36⑨	1.32⑨	28⑨
ソ連	4	19	10	3	6	30	21	23⑩	68.42⑥	1.58⑮	1.11②	1.43⑧	25⑧
オランダ	4	16	8	3	5	32	19	19⑪	68.75⑤	2.00⑤	1.19⑤	1.68③	13②
ポーランド	3	14	9	1	4	27	17	19⑪	71.42④	1.93⑦	1.21⑥	1.58⑤	18⑤
オーストリア	4	18	9	1	8	33	36	19⑪	55.55⑭	1.83⑨	2.00⑱	0.92⑮	42
チェコスロバキア	6	22	8	3	11	32	36	19⑪	50.00⑱	1.45⑱	1.64⑭	0.89⑯	48
フランス	7	20	8	1	11	43	38	17⑮	45.00⑲	2.15④	1.90⑯	1.13⑫	32
チリ	5	18	7	3	8	23	24	17⑮	55.55⑭	1.27㉒	1.33⑦	0.95⑭	43
スペイン	5	18	7	3	8	22	25	17⑮	55.55⑭	1.22㉓	1.38⑩	0.88⑰	50
スイス	6	18	5	2	11	28	44	12⑱	38.88㉒	1.55⑯	2.44㉒	0.63㉑	59
メキシコ	8	24	3	4	17	21	62	10⑲	29.16㉕	0.87㉕	2.58㉓	0.33㉕	73
ペルー	3	12	4	1	7	17	25	9⑳	41.66㉑	1.41⑳	2.08⑲	0.68⑲	58
スコットランド	4	11	2	4	5	12	21	8㉑	54.54⑰	1.09㉔	1.90⑯	0.57㉓	63
パラグアイ	3	7	2	2	3	12	19	6㉒	57.14⑬	1.71⑫	2.71㉔	0.63㉑	57
アメリカ	3	7	3	0	4	12	21	6㉒	42.85⑳	1.71⑫	3.00㉖	0.68⑲	47
ルーマニア	4	8	2	1	5	12	17	5㉔	37.50㉓	1.50⑰	2.12⑳	0.70⑱	55
ブルガリア	4	12	0	4	8	9	29	4㉕	33.33㉔	0.75㉖	2.41㉑	0.31㉖	73
ベルギー	5	9	1	1	7	12	25	-3㉖	22.22㉖	1.33㉑	2.77㉕	0.48㉔	70
ボリビア	2	3	0	0	3	0	16	0㉗	0 ㉗	0 ㉗	5.33㉗	0 ㉗	81

表—10 European International Matches By Countries

Country	Number of Matches	Year of First Match	Number of Countries Met	Percentage Success	Goal average	Goals per match
1. U. S. S. R.	82	1924	29	72. 56	2. 29(1)	2. 21(11)
2. England	382	1872	33	68. 59	2. 13(2)	2. 91(1)
3. Scotland	305	1872	26	65. 74	1. 74(3)	2. 43(4)
4. Hungary	369	1902	38	64. 91	1. 68(5)	2. 78(2)
5. Spain	148	1920	31	64. 86	1. 71(4)	2. 28(9)
6. Italy	234	1910	32	64. 32	1. 44(7)	2. 10(13)
7. Sweden	393	1908	39	60. 31	1. 55(6)	2. 69(3)
8. West Germany	251	1908	38	58. 96	1. 42(8)	2. 40(5)
9. Yugoslavia	254	1920	46	58. 27	1. 31(10)	2. 37(7)
10. Czechoslovakia	252	1920	34	57. 94	1. 34(9)	2. 18(12)
11. Austria	303	1902	29	55. 61	1. 21(12)	2. 26(10)
12. Denmark	256	1912	32	55. 08	1. 28(11)	2. 38(6)
13. Netherlands	270	1905	32	52. 22	1. 14(13)	2. 29(8)
14. Rumania	153	1922	29	50. 98	0. 96(14)	1. 87(17)
15. Rep. of Ireland	102	1924	27	48. 53	0. 85(17)	1. 72(18)
16. Turkey	89	1923	31	47. 19	0. 84(18)	1. 57(21)
17. Bulgaria	144	1924	28	45. 14	0. 70(22)	1. 47(24)
18. France	272	1904	33	44. 49	0. 86(16)	1. 92(16)
19. Belgium	307	1904	29	43. 65	0. 83(19)	1. 93(15)
20. Poland	185	1921	30	43. 51	0. 93(15)	1. 99(14)
21. Norway	280	1908	30	40. 89	0. 71(21)	1. 72(18)
22. Albania	27	1946	9	40. 74	0. 40(29)	0. 85(31)
23. East Germany	51	1952	19	38. 24	0. 82(20)	1. 55(22)
24. Portugal	120	1921	25	36. 67	0. 66(23)	1. 45(26)
25. Wales	259	1876	20	36. 48	0. 64(25)	1. 46(25)
26. Switzerland	289	1905	30	35. 99	0. 66(23)	1. 65(20)
27. Greece	63	1920	18	33. 33	0. 52(26)	1. 33(27)
28. Malta	5	1960	3	30. 00	0. 27(32)	0. 80(32)
29. Finland	226	1911	27	27. 43	0. 46(27)	1. 49(23)
30. N. Ireland	239	1882	15	27. 20	0. 41(28)	1. 22(29)
31. Iceland	29	1946	9	20. 71	0. 36(30)	1. 21(30)
32. Luxemburg	52	1911	20	19. 23	0. 36(30)	1. 31(28)

き興味ある対照的事実が示される。即ち西ドイツ，ハンガリーを攻撃型，イタリア，ソ連を守備型，ブラジル，オランダ，ポーランドが均衡型であり，その順位は均衡型，攻撃型，守備型の順である。

表—10は，ヨーロッパ諸国同志の International Matches の結果であり，出所は The Football Association Yearbook 1965—66，である。この表ではイングランド，スコットランドの両国にその創設の時期からの記録が集計されているから当然上位を占める。

この勝率と G. A. の相関は程んど完全な一致と考えて良い。従って，G. A. は単なる得点と失点の比率を示すものではなく，攻守のバランスの指標と考えて良い。

ソ連がその安定した守備力で高い勝率を上げていることに特に注目したい。又イタリー，スペインが守備型であること，ハンガリー，西ドイツが攻撃型であることは先のワールドカップ戦の記録で概観した通りであり興味深い。

この表—11は同種の検討を日本サッカーリーグについて試みることを意図し，1965年から1977年までの同リーグの戦績を勝率の高い順に列挙したものである。尚得点は日本サッカーリーグの公式の年次報告書である，日本サッカーリーグ年鑑1965—78の記述から抜萃した。1977年から，引分けは P. K. 戦によって決着をつけることになっているが，この表では従来通り引分けとして扱っている。

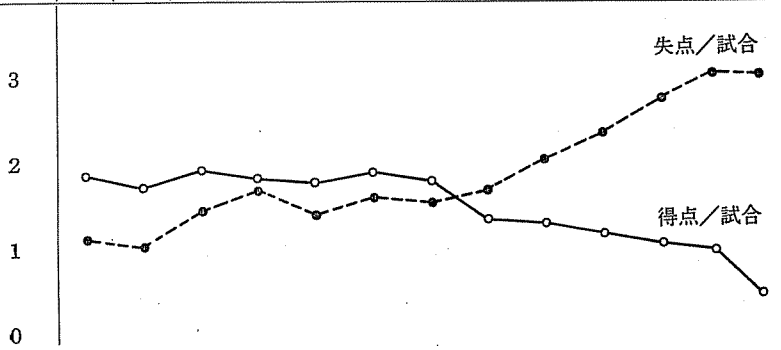
この勝率順は現在の力関係とは本来的に無関係であるが，この結果から次の興味ある事実を得たので報告する。

(1) 当然のことであるが，高い勝率を示すためには守備と攻撃の均衡がとれたチーム力が必要で，特に自チームの得点が少ない場合は失点しないこと，即ち攻撃力に頼らない純粋な守備力の高いことが必要である。これは，三菱が一試合当りの得失点で二位でありながら群を抜いて負け率の低いことに象徴される。

(2) 東洋工業とヤンマーは対照的な攻守力を示している。東洋の守備力は

表—11　日本サッカーリーグ1965—1977チーム別戦績

	三菱重工	東洋工業	ヤンマーディーゼル	古河電工	日立	新日鉄	フジタ	永大	日本鋼管	富士通	名相銀	トヨタ	田辺製薬
試合数	202	202	202	202	202	202	104	54	174	18	84	132	18
勝	113	103	96	93	91	90	44	19	38	3	9	14	1
(%)	55.94	50.99	47.52	46.04	45.05	44.55	42.31	35.18	21.84	16.67	10.71	10.61	5.56
分	45	39	41	43	47	40	21	12	43	6	11	19	1
(%)	22.27	19.30	20.29	21.28	23.26	19.80	20.19	22.22	24.71	33.33	13.09	14.39	5.56
負	44	60	65	66	64	72	39	23	93	9	64	99	16
(%)	21.78	29.70	32.17	32.67	31.68	35.64	37.5	42.59	53.44	50.00	76.19	75.00	88.88
得	386	360	389	366	351	359	176	67	197	18	76	1.06	7
(／試)	1.91	1.98	1.93	1.81	1.74	1.78	1.69	1.24	1.13	1.00	0.90	0.80	0.39
失	235	209	284	360	273	309	147	83	337	38	210	382	51
(／試)	1.16	1.03	1.41	1.78	1.35	1.53	1.41	1.54	1.94	2.11	2.50	2.89	2.83
G. A.	1.64	1.71	1.37	1.02	1.29	1.16	1.18	0.81	0.58	0.47	0.36	0.28	0.14
勝率順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
得／試順位	2	4	1	3	6	5	7	8	9	10	11	12	13
失／試順位	2	1	4	8	3	6	5	7	9	10	11	13	12
G. A. 順位	2	1	3	7	4	6	5	8	9	10	11	12	13
順位計	7	8	11	22	18	22	23	31	36	40	44	49	51
合計順位	1	2	3	5	4	5	7	8	9	10	11	12	13



リーグ随一でありながら得点が比較的少い。加えて引分けが少いことが致命的である。それはG.A.が第一でありながら勝率において第二位となる原因であり，本来的に引分けに出来た試合で敗れたことを意味している。ヤンマーは釜本選手に代表される攻撃型のチームであるが，多得点，多失点はその守備力の増強が問題だと言えよう。

(3) 日立は比較的強い守備力に支えられ，非常に高い引分率に依存している。チーム力からは古河以上の勝率を示すことの可能なことを認めるが，得点力に今一つ欠けている。

(4) 古河は勝率第4位でありながらG.A.値が第7位と低い。然も一試合当りの平均得点は第3位で失点は第8位である。又得点失点の平均値が極めて接近していること等から，負ける時は力以上に失点するのだと考える。

(5) フジタは最近チーム力をつけて来たチームのためにG.A.値が比較的高いのに勝率が低くなっているのである。

(6) 一般的に勝率50％のチームはG.A.が1.00に近いことが最も標準的と思われるが，この表ではG.A.値に比して勝率はきわめて低い。

(7) 上位7チームについては若干の順位変動の可能性もあったが，下位チームは力通りの順位と言うことが出来る。これは下に示した図にも現われている。即ちG.A.値に決定的な差があることを根拠とする。

(8) 上位グループと下位グループでは前者に比して後者のG.A.値の差は激しく，これは失点が多いことに由来する。図におけるカーブに注目したい。

(9) 失点と得点の比率が逆転するのは両者共に1.5点である。

（6）

以下結論的に述べれば，サッカーは双方互角の条件，即ち規則を遵守する立場で一個のボールを，持てる技術戦術の限りを尽して90分間の内にどれだけ相手ゴールに入れ，相手に入れさせないよう努めるかを競うものである。

近代サッカーにおいても，このゴールに入れる，入れさせないの矛盾的関係を明解かつ論理的に解決した戦術論は報告されていない。然し世界のサッカー界の動向が守備的側面から展開して今後その傾向が強まるのであろうことは，世界のトップチームが負けまいと意図すれば，それを可能にする能力を示し始めていることによって明らかである。

すでに数年前からサッカー競技の Off-side Laws を改正するに当っての基礎的な研究が始っているとの風聞に接しているが，それは世界の趨勢が守備重点主義に向って確実に動いている好例を示すものでもある。同じ一点差であっても２：１で勝つことより１：０で勝つことがトップチームでは重要な課題になって来ているのである。

一方，日本サッカー界における守備的側面は未研究領域が多過ぎるようである。その原因の一端は戦術論に対する受けとり方に問題があると考えている。システムを云々する前にボールコントロールを，とする議論は確に現実的側面を衝いている。然し基本的に，受動的でない独創性のある戦術論及びそれに立脚するシステム論が無くて，いかなる技術的要素やその習熟に関する方法論が分析解明出来るのだろうか。

本稿は先にワールドカップ予選の必勝点は３点であることを示して来た。勿論これは過去になかったから，これからも無いとする根拠にはならない。然しいかなる相手に対しても３点以内の得失点で勝敗を争うことはチームの目標になって良いはずだと考える。

得点が無限的に狙われたり，完全な守備が要求されるのは，その両者に矛盾が生じている事実に目をつぶっているからだと考える。

先に示した通り自分と同等の，もしくは上の力関係の相手に対しては前半に得点させないことが負けないための絶対的要件である。

そこに守備に対する基本的出発があらねばならない。即ち攻撃的手段を放棄すれば，絶対的に守備出来る可能性を追求することを基盤に，どこまで攻撃手段を犠牲にするかを相手との力関係から割り出す作業が戦術論の発展段階だと考える。

日本のサッカー界は過去に西ドイツから多くの事を学び，これは今後も絶対的に必要なことである。しかし西ドイツが世界の最高水準の中でも，最も攻撃的なサッカーを行っている事実を承知せねばならぬし，日本サッカー界に攻撃的サッカーを受容出来る素因があるかどうか，言い換えると多彩な，競技に関する国際的な情報が国内でどのように受容され伝播されて来たかの検討が今後の重要な課題であると考える。

尚本稿で示して来た，F.A.フットボールリーグ，ワールドカップ大会，日本サッカーリーグ等の諸資料と同種の資料を全国高校選手権大会，全日本サッカー選手権大会，関東大学サッカーリーグ戦第一部及び第二部，国民体育大会サッカーの部等についても収集し吟味検討を加えたが，広範に亘るため割愛せざるを得なかった。何れ機会を見て発表したいと考えている。